

Title	『同胞』時代の新人会の活動
Sub Title	The Shinjinkai activity in "Doho" period
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori) 酒井, 正文(Sakai, Masafumi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.11 (1980. 11) ,p.94- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19801115-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『同胞』時代の新人会の活動

中 村 勝 範
酒 井 正 文

一 問題の所在

新人会は機関誌『同胞』（大正九年十月発刊、同十年五月終刊）において、その精神的拠り所をわが国に昔から存在したと新人会員が考えた共同体社会にもとめ、物質主義の資本主義制度に侵食された社会から平穩な相互扶助の営まれる共同体社会の回復をめざし、これに役立つと思われる思想をことごとく受容の対象としていたことを、すでにわれわれは指摘しておいた。⁽¹⁾ その際、残された問題は、新人会の活動の検討であつた。新人会はその成立の背景、事情が示すように、⁽²⁾ 思想研究を第一義の団体目的としていたのではなかつた。設立の趣意は「日本ノ正当ナル改造運動ニ従フ」ことであつた。⁽³⁾ われわれは、新人会の思想の検討を通して、その改革思想の彼岸に、かれらが理想とする共同体社会を垣間見たが、それは新人会の活動の検証によつても、十分裏づけられなくてはならない。新人会員は、学生、労働者、農民、知識人等の間を駆け、北海道から

九州までを縦断し、中央と地方を往復していた。思想の啓蒙宣伝は、機関誌『同胞』の発行をはじめ、講演、演説、対話、討論等の活動によって展開した。実践活動の有力な対象には、労働者、農民、地方支部会員があつた。新人会は、広域的、多面的、積極的な活動を繰り広げていた。われわれはこの新人会の活動面においても、いま研究に着手しようとしている。本稿は、既刊の拙論においてはほとんど未着手であつた『同胞』発行時代における新人会の活動を仔細に検討し、いかなる側面に新人会の思想、精神が表出したか、またその活動源はいずこにあつたか、を考察することを目的としている。

- (1) 中村勝範・酒井正文「『同胞』の思想」(『法学研究』第五十二卷第十一号、昭和五十四年十一月)。われわれの問題意識については、併せて以下の論文を参照されたい。中村勝範・内川正夫「『デモクラシー』の思想」(右同、第五十二卷第二号、昭和五十四年二月)、中村勝範・吉田博司「『先駆』の思想」(右同、第五十二卷第十号、昭和五十四年十月)、中村勝範・内川正夫「『ナロード』の思想」(右同、第五十三卷第四号、昭和五十五年三月)。
- (2) 中村勝範・酒井正文「新人会成立の背景」(右同、第五十一卷第五号、昭和五十三年五月)を参照されたい。
- (3) 「新人会綱領」(『デモクラシー』第二号、大正八年四月、二〇頁)。

二 啓蒙宣伝

大正九(一九二〇)年三月以降、世界的規模の不景気はわが国経済を暗転させ、強烈な恐慌の嵐に捲き込んだ。新人会は機関誌『同胞』の時代をこの戦後恐慌の最中に開始することになった。⁽¹⁾ 餓首、倒産、失業の時代であつた。労働争議が減少した。労働者は自己の生活防衛に汲々たる状況であつた。生活の糧をもとめ、急進的な労働運動、サンジカリズムに傾斜するものも現われた。不安と動揺に揺れる社会状況に新人会は直面することを余儀なくされた。『同胞』はその誌面の相当部分に、不景気とその影響や被害を浮き立たせ、不景気の元凶、資本主義制度との対決姿勢を固めた。他方、国内政治は首相原敬の下に不動の支配勢力が築かれている状況であつた。原政友会内閣は、議会内外における普通選挙要求の動きを制するために、大正九年三月、機を捉えて衆議院の解散を断行、同年五月、圧倒的勝利を収め、いわゆる大正デモクラシー運動の発

現であつた普選運動に冷水を浴びせた。普選要求の声はトーンを下げ、沈静し、大衆による示威運動の圧力は低下した。新人会結成時の政治的関心であつた普選要求は、全く新人会員から消え失せた。「我等には普選運動は冷やかな一瞥なのだ」といい、「普通選挙は政党の玩具であり、議院内の遊戯である」と断じている。政治的には動かし難い原政友会内閣統治下にあり、経済的、社会的には不安と動揺を除くことができない状況下に新人会は位置していた。

大正九年七月七日、新人会は本部を東京市本郷区駒込上富士前五番地に移転し、同年七月以降の活動の本拠地を設定した。本部には八、九名が収容可能であつた。黒田寿男、莊原達、小岩井浄、千葉雄次郎、新明正道らの姿が見える。『先駆』第七号、『同胞』第一号から第八号までと、『ナロオド』第一号から第七号まででここに編集された。大正九年十月からは、新人会叢書の出版も開始し、本部の活動は順調に回転した。同年十二月一日、創立二周年記念会が、数十名の来客を招いてこの地でおこなわれた。新人会は本部に加え、研鑽の場として大学内控室も活動の拠点とし、森戸辰男、榎田民蔵らとの接触をもつた。同控室では、会員だけの読書会が定期に開かれ、ブレンターノ著・森戸辰男訳『労働者問題』（岩波書店 大正八年十月三日）が読まれたこともあつた。新人会本部では、社会主義者との交流もあつた。大正九年十月十三日、堺利彦を招き、「社会主義の分派に就いて」と題した講演を聞いた。同年十一月十四日、「放浪八年」の滞仏生活を終えて帰国したアナキスト石川三四郎を招聘し、懇談の機会をもつた。住谷悦治、松沢兼人、風早八十二ら四、五名がその晩、石川と餐をともにしたが、石川の話は新人会員を魅了した。住谷悦治は日記に「石川氏の玲瓏玉の如き人格に欣慕の情を起す」と記している。三日後の十一月十七日には、新人会は帝大法科三十二番教室において、石川三四郎の講演会を主催した。三百名の聴衆を前に、石川は「土民生活」と題して講演した。住谷はその日の日記に「土民生活」にデモクラシーという振り仮名をつけた。日本官僚養成所、保守反動思想の牙城ともいわれた東京帝国大学で「主義者」の講演会を開くことは、まさに破天荒のことであつた。「土民生活」は、帰国後の石川の第一声であつた。土民生活とは、自治の生活であつて、農民が土地を耕し

つつ自分たちの社会生活を営み、労働者が自分たちの工作に努力しつつ組合生活を発展させ、田野における農民の生活活動と、工場における労働者の努力とが互いに相助け、相補つて共同の利益の増進をはかるという趣意のものであつた。⁽¹⁷⁾ 石川によつて相互扶助の社会生活が説かれたのである。新人会員は、この石川の講演に「全く感動」した。⁽¹⁸⁾ 『同胞』(第三号)は、「デモクラシーとは士民生活ということである」と、石川の言葉を掲げた。このような石川との接触と、その感化、影響は、『同胞』に表出した新人会の理想の社会観と無縁でない。

新人会は『同胞』刊行期間において、大学構内五回、⁽¹⁹⁾ 学外三回の講演会ないし演説会の開催を記録したが、こうした活動の一端にも、新人会の理想の社会観の出現を瞥見できる。大正十(一九二二)年四月一日から三日まで、平貞蔵、新明正道、蟻山政道の三名の新人会員に、長谷川如是閑、大熊信行を加えた一行は、山形県下に講演旅行をおこなつた。四月一日は米沢市、二日は山形市の県会議事堂が講演会場であつた。⁽²¹⁾ 新人会は、その講演旅行記において、その会場の聴衆が解放運動に関心の薄かつたことを率直に認めた上で、なおひとりの老人の言葉を引用した。老人には、新人会一行の話が、これまで聞いたデモクラシーの話と違つて少し共産主義的だ⁽²²⁾と感じられたことを紹介した。少し共産主義との表現はあつても、その老人にボルシェヴィズムの理解があつたと考えるのは早計だろう。新人会の主張であつた、働かざる寄生階級がなく相互に扶助し共に働く情誼の通り理想の社会像が強調されれば、これを共産主義的と表現することも不自然ではない。さらに、出身高等学校に赴き、弁論大会に参加した新人会員の演説は、彼らの社会観を明確に表出していた。大正九年十一月二十七日、早坂二郎とともに第二高等学校において開催された先輩招待演説会に登壇した住谷悦治は、「労働者運動の倫理及其傾向」と題して演説した。⁽²³⁾ 住谷はデモクラシー、ギルド社会主義、社会連帯(ソリダリティ)、プロレタリア社会主義、アナーキズムなどの諸思想を鏤め、調子高く演説を纏めたが、終るにあたり、「将来の労働問題はあらゆる階級の人が真に現在の人類生活の誤謬を自覚し、人類を熱愛する博大な心を以て現在の不合理なる経済的社会組織を改造し、過去の誤れる経済組織の

下に生れたるあらゆる悪徳の暗黒より人類の精神を解放し、真に平等の観念、相互扶助的社会連帯の精神を以て、我等の生活を築き上げるることによつてのみ遂げらるる」と訴えた。相互扶助的生活の理想像が説かれたのである。このように、新人会の活動の一部分である啓蒙宣伝活動には、既刊の拙論において指摘した新人会の理想の社会観を垣間見ることが出来る。

- (1) 中村勝範・酒井正文「『同胞』の思想」(『法学研究』第五十二巻第十一号 昭和五十四年十一月)を参照されたい。
- (2) 『普選運動と労働者階級』(『同胞』第五号 大正十年二月 一頁)。
- (3) 河田透「造語と労働」(右同 第六号 大正十年三月 五頁)。
- (4) 『新人会記事』(『先駆』第七号 大正九年八月 一頁)。
- (5) 『家宅捜索』(『同胞』第六号 八頁)。
- (6) 新人会は次のように案内した。『新人会叢書の第一編ロシア社会学(波多野君訳)と第二編修正派社会学(嘉治君訳)は十月中に出版する運びになつて居ります。』(『上富士前町から』(右同 第一号 大正九年十月 八頁)。
- (7) 『新人会記事』(右同 第四号 大正十年一月 八頁)。
- (8) 森戸辰男、櫛田民蔵と新人会との接触は『デモクラシー』の時代からのものであつた。大正九年十月四日、新人会は洋行する櫛田と筆稿事件で入監する森戸の送別会を開いている。(『上富士前町から』(右同 第二号 大正九年十一月 八頁)。
- (9) 『上富士前町から』(右同 第六号 七頁)。右同記事によれば、開始時期は不明だが、同研究会は毎週木曜日午後七時から前出控所で開かれており、大正十年一月には、二日、十日、十七日、二十四日の四回おこなわれた。
- (10) 例えば、山川均との関係もあつた。新人会は「山川均氏からのある原稿を送つて頂いたのであるが、途中何処へ紛れ込んだものか未だ到着しないので掲載できない」と通知した。(『上富士前町から』(右同 第五号 八頁)。
- (11) 『上富士前町から』(右同 第二号 八頁)。
- (12) 『新人会記事』(右同 第三号 大正九年十二月 八頁)、及び住谷悦治『あるところの歴史』(同志社大学住谷篠部奨学金出版会 昭和四十三年十一月五日) 二七四頁。
- (13) 右同『あるところの歴史』右同頁。
- (14) 右同書 二七四―五頁。
- (15) 右同書 二七五頁。
- (16) 石川三四郎『土民生活』(『石川三四郎著作集 第八巻』(青土社 昭和五十二年十月十日 所収) 四二七頁)。
- (17) 右同 四二九―四三〇頁参照。

(18) 前掲、住谷『あるころの歴史』二七五頁。

(19) 大正九年十月二十二日、演説会を帝大法科三十二番教室で開く、沢田清兵衛「開会の辞」、川原治吉郎「解放運動の倫理」、早坂二郎「本能の進化と経済生活」、赤松克麿「無産階級の独裁政治に就いて」(「上富士前町から」△「同胞」第二号 八頁▽)。大正九年十一月十七日、帝大法科三十二番教室において、三百名を集め、前掲石川三四郎の演説会があり、佐々弘雄も登壇し「ヒューマンイズムの立場」を講演した(「新入会記事」△右同 第三号八頁▽)。大正九年十二月十五日、帝大法科三十二番教室において演説会、弁士と演題は下記の通り。風早礼二「唯物史観と日本歴史」、金俊淵「独立人の心理」、権田保之助「理想の現実性と概念の具象性」(「新入会記事」△右同 第四号 八頁▽)。大正十年四月二十六日、午後三時から帝大法科三十二番教室において、新入生歓迎演説会、二〇〇名を集めた。黒田寿男「動物的存在より人間的存在へ」、新明正道「社会に対する迷信」、蠟山政道「団結権承認前後に於ける英国の社会事情」(「上富士前より」△右同 第八号 大正十年五月 八頁▽)。大正十年五月十九日、大学内三十番教室において、三〇〇余名を集め、公開演説会を開催。細迫兼光「未来の闇黒へ」、佐野宇「日本の政治的進化に就いて」、吉野作造「思想家の誘惑」(「上富士前町から」△「ナロオド」第一号 大正十年七月 十六頁▽)。

(20) 大正九年十月二十五日から二十七日まで、新入会は第二回学術講演会を、神田、帝國教育会で開催した。講師は下記の通り。北沢新次郎「労働組合の諸問題」、長谷川如是閑「ソリダリティの法」、室伏高信「ギルド社会主義の発達及其原理」、有島武郎「ホイットマンに就いて」(「上富士前町から」△「同胞」第二号 八頁▽)。大正十年四月一日から三日まで新入会は米沢、山形講演旅行を行った。新入会から平貞蔵、新明正道、蠟山政道、外部から長谷川如是閑、大熊信行が参加し米沢中学校、山形県会議事堂で開催した(「米沢山形講演旅行」△右同 第八号 七頁▽)。大正十年五月三日、午後三時から、京都第三高等学校新徳館で、新入会演説会を開催。新入会から来間恭、山崎一雄、新明正道が出演したほか、富田碎花「愛蘭詩人の群」、石川三四郎「進化と表現」の演説があつた(「上富士前町から」△「ナロオド」第一号 十六頁▽)。

(21) 山形では、思想問題講演会と称され、次の内容が予告された(『山形新聞』大正十年四月二日付)。開会の辞(明治大学講師 法学士平貞蔵)、社会問題所見(帝大学生 新明正道)、輿論(中央大学講師 法学士蠟山政道)、創造の生活と征伏本能(長谷川如是閑)、閉会の辞(小樽高商講師 商学士大熊信行)。

(22) 前掲「米沢山形講演旅行」。

(23) 前掲、住谷『あるころの歴史』一四九頁。

(24) 右同 一六二頁。

三 労働者

大正九年から同十年にわたりわが国思想界、労働運動界を風靡したのは、サンジカリズムであつた。『同胞』がその影響を

誌面に反映させたことはすでに指摘しておいた。サンジカリズムの影響を受けた都市の工場労働者の組合のなかでは、友愛会所属東京鉄工組合がその色彩濃く、活動も急進的であつた。新人会は、東京鉄工組合所属の各組合に発生した争議について、その概要を紹介し、好意的に論評した。足立製作所(大正十年一月)、日本鉄工株式会社(同年一月)、園池製作所(同年三月)などの著名な争議について打ち出した新人会の立場は、同争議を紹介、批評した友愛会機関誌『労働』と比較すると急進的であり、サンジカリズムの影響がうかがえた。『労働』のつぎの一文は、獄に繋がれた争議の犠牲者に愛惜の情を注ぐものであつた。すなわち、「家には稼ぎ人を失つた妻君が老いたる父母、父よ!父よ!とて泣き叫ぶ小児をいだいて夫並に同志の身の上や如何に、今後の生活状態や如何にと毎日心配せられて居らるゝであろう」という。ここには争議の犠牲者とその家族にのしかかる現実の生活問題を意識したものがあつたが、この実生活上の感覚は、この時期の新人会員の中にはない。新人会では、労働争議において犠牲者が発生するのは、やむをえないと考えていたようである。吾等は、弱者なるが故に、奴隷なるが故に反抗せざるをえない、吾等が強者となる日まで、吾等が吾等の真の力を自覚する日まで吾等の血を以て反抗する、と記すのであつた。足立製作所の争議は、組合指導者泉忠の誠首問題と職工の解雇がこじれ、工場襲撃、工場主・事務員の傷害、機械の破壊をともなつた争議として有名となつたが、新人会はこの工場に押寄せた労働者の一団が工場主に制裁を加えた、として組合の行動を支持した。日本鉄工株式会社の争議は、事業不振による職工の解雇をめぐる発生したが、新人会は「半月の戦闘の後我労働運動史上画時代的新例を開きて勝利の栄冠を収め、足立工場の組合員と相俟つて東京鉄工組合の声誉を高からしめた」と評している。園池製作所の争議では、治安警察法の発動によつて組合幹部が検挙されたが、新人会は、当局の圧迫のなかで同組合が反抗と敢為の精神を強めていると記し、「全く御立派な治安警察法のお蔭であろう」と皮肉を浴びせ、労働運動推進の障壁である同法第十七条を糾弾した。

新人会は、このように急進的な労働組合による労働争議に注目した。いずれも、資本主義の悪弊を強烈に被つた都市の被

害者である。新人会が労働争議に接近した背景には、同会がそれに先立ち労働者及び労働組合へ浸透しつつあったからである。『同胞』大正九年十二月号には、依然諸方面の労働講習会の援助を為している。今月中また新たに城南の一つの講習会の補助の出来るように成つた、とある。また新人会は、『同胞』を講習会の講話の資料にするため、些か取材を制限し、文句も平明にすることにし、労働者との接触の姿勢を整えた。東京の城南地区、品川区大崎の日本鉄工株式会社に勤めていた東京鉄工組合の活動家中田惣寿と妻小春は、大正（一九一八）七年十月結成の同鉄工組合の活動家たちが、大崎における新人会員との研究会である木曜会を通じて、サンジカリズムの思想的影響を受けたことを述懐している。「新人会の連中がよくきてね、私のうちが木曜会の宿になつた」といふ。研究会を重ねるうち、妻小春は夫惣寿よりも左になつた、と回想するのである。東京鉄工組合大崎支部の急進的活動家横石信一による「労働者の真の叫」と題した一文の『同胞』への寄稿は、新人会員と急進的労働者との交流の様態を裏打ちするものであつた。横石は、労働者が真に人間として生き、人間の自由と平等と幸福を求めるならば、労働者が現在の制度、経済奴隷より解放されることである、労働者は人生の体験者である、現実⁽¹⁰⁾に依る叫びこそ何物をもはね返す力がある、と訴えた。新人会では、従来より友愛会城南連合会を中心に、しばしば佐野学、岡上守道、山名義鶴などの先輩が、労働講習会の講師を努め、その実績を着実に挙げていた。また赤松克麿、門田武雄が友愛会支部で講演したことがある。『同胞』の時代に入つては、赤松が友愛会東京連合会労働講習所の臨時講師を勤めたこともあつた。⁽¹¹⁾大正九年十二月二十二日、講師北沢新次郎病欠のため、代つて「露西亞の労農法」を講義した。このように、新人会は都市の急進的な工場労働者と労働組合との交流を、会の活動の中に加えていた。新人会は都市の労働者への浸透をこのようにして進めていたが、このようなことは『ナオド』の時代に至るとほとんどなくなる。

新人会員の地方巡りは、同会結成以来幾度となく行なわれていたが、『同胞』の時代の会員の訪問先には、いわゆる肉体労働者とその労働現場が組み込まれ、会員と労働者との交流、接触の場がもたれた。『同胞』創刊号に掲載された旅行記は、労

働者の世界はその仕事場にある、その緊張した労働にある、と記し、不況下において逆境の試練に耐え、逞しく働く肉体労働者の姿を感激をもつて描写した。⁽¹⁵⁾ 地下数百尺の暗黒の世界、所々に点された電灯も、仕事をして居る人々には行きわたらぬ、手にした安全灯の光が身に迫る暗を消す、最も頼もしい伴侶である、ここに彼等は鶴嘴を揮う、岩層が砕けて下敷にされるかも知れぬ不安を、絶えず感じながら、あるいは恐らくその恐怖を感じないようになつて、黒い岩層の中に金属を打ち込む、潑瀾たる力の表れそこに彼等の無我の境がある、と表現した。

大正九年末から同十年正月にかけ、三輪寿壯、嘉治隆一、荏原達、千葉雄次郎の四名の新人会員が北海道に向い、小樽、札幌、夕張、登川、真谷地などを巡つてゐるが、ここにおいても現場の肉体労働者との交流、接触が目的の大なるものであつた。新人会員が夕張まで足を運んだのは、北国の鉱山生活を知ろうという意図からであつた。「私達と因縁の深い全日本鉱夫連合会の数多くの会員諸君が雪深い夕張の山奥で炭にまみれ乍ら營々として労働の苦痛を嘗めて居る」⁽¹⁷⁾ その実態を知らんがためであつた。北海道夕張炭鉱には、大正九年十月二十日に結成された全日本鉱夫総連合会の夕張連合会本部があり、同年十月十六日から二十五日までは総連合会本部理事麻生久、同相談役棚橋小虎と副理事坂口義治が夕張を本陣に、登川、真谷地に逗留し、宣伝活動、オルグ活動に當つてゐたが、前出の新人会員はほぼこのコースを辿つた。夕張では、夕張連合会本部を訪れ懇談し、さらに一行は鉱夫の家庭に分宿、真谷地でも鉱夫宅に宿泊という旅程であつた。暖炉の熱に外界の寒さも忘れて、あるいは坑内の労働、あるいは生活の話、組合のことなどを聞き、実生活に根拠をおいたそれらの話に強い印象を受けた。⁽¹⁹⁾ のであつた。登川では、四、五百名の聴衆を集め、土地の劇場公信館で、夕張連合会の幹事、同会登川支部員らとともに講演会を開いた。⁽²⁰⁾ 麻生ら一行の夕張逗留と並んで、新人会員一行の同地方訪問は、夕張全山を燃え上がらせ、大闘争へ発展させたという論者もいる。⁽²¹⁾

大正十年一月七日から十六日まで、赤松克麿が九州の炭鉱地帯に逗留し、行く先々で筋肉労働者と交流してゐる。赤松

は、労働者が話すさまざまな生活上の不満や苦痛は、虐げられしプロレタリアの悲しい呻吟であり、胸が一杯になった⁽²²⁾、と記した。要するに、新入会員たちは、地方に向向いた先で、不況と生活苦に苛まれながら、懸命に働く肉体労働者と接触する機会をもとめたのである。

新入会と鉱夫との関係は『デモクラシイ』発刊以来継続したものであつた。先輩佐野学は、全国坑夫組合の創立に携わつた。『デモクラシイ』は、大正八年九月六日、佐野学、全国坑夫組合発会式のため、石渡春雄らと足尾へ出発、と報じている。⁽²³⁾『先駆』では、大正八年十二月二日、日立鉱山での友愛会日立支部演説会において、麻生久、棚橋小虎の二名が公務執行妨害で検挙され、水戸監獄に収監された有名な事件が掲載されている。⁽²⁴⁾新入会は先輩を通じて、鉱山労働者との因縁が深かつたわけである。⁽²⁵⁾『同胞』においては、新入会員の交流、接触の対象として、足尾銅山の例も挙げることができよう。大正九年九月二十八日から三日間、麻生久、三輪寿壯は足尾銅山における三種の鉱夫組合の合併式に赴き演説したが、⁽²⁶⁾『同胞』のその紀行記は、新入会が足尾に「我国労働運動発祥の地」として熱い視線を注いだことを表わしている。足尾鉱夫の胸には明治四十年勃発した騒乱の記憶が強く刻まれている、会社の非道と官憲の压制迫害は無辜の民にして罪を被せられた幾多の人々の悲惨な挿話と共に足尾労働者が好んで語る、その時の様を彷彿して目をうるませ声を曇らせて夜の更くる迄語り続ける、彼らの十数年前の経験は彼らに奴隸的生活を脱せねばならぬという抜くべからざる信念を植付けた、⁽²⁷⁾と記した。足尾の土を踏み、犠牲者の墓場に立つた新入会員は、無辜の民の生活を犯してきた資本主義及び資本家に対する怨念を隠さなかつた。⁽²⁸⁾

『同胞』誌に現われただけでも、新入会が鉱山とその鉱山労働者への訪問に熱心であつたことがわかる。大正九年十一月二十二日、二十三日、赤松克麿、門田武雄は、麻生らとともに足尾に向向き演説した。⁽²⁹⁾同年十二月中にも門田は北海道の鉱山地方を遊説している。⁽³⁰⁾九年末から翌十年正月にかけては、前出の北海道旅行、十年一月には赤松による九州の鉱山地帯訪

問⁽³¹⁾ 十年三月、三輪寿壮、赤松克麿は、夕張炭鉱の罷業問題で北海道に出かけ、帰京後赤松は争議中の足尾へ、三輪は九州へ出発⁽³²⁾という状態であつた。なかでも、赤松が足尾において目撃した大正十年三月の争議は、友愛会麻生久の指導により、労働者の現実的な利益を引き出し、穏健裡に事態の解決に向かつていた。サンジカリズムの高揚期であつたため、この争議指導を墮落とする急進派の攻撃⁽³⁴⁾もあつたが、赤松はこの争議指導を一糸乱れざる労働運動の訓練と称賛する意見を『同胞』⁽³⁵⁾に発表した。このように、現場の鉱山労働者との交流、接触をはかつた新人会員は、労働組合主義による組合指導に好んで接触した。都市の急進的労働運動との接触をもち、地方の鉱山労働者との交流、接触を大切にした新人会は、両者との接触を通じてより鮮明に際立つた資本主義制度下の悪弊を糾弾した。新人会は彼らの理想の社会の実現のため、思想的には、サンジカリズムも労働組合主義もこれに役立つならば併呑⁽³⁶⁾し、活動においては虐げられし労働者との連帯を高めた。

- (1) 中村勝範・酒井正文「『同胞』の思想」(『法学研究』第五十二卷第十一号 昭和五十四年十一月)を参照されたい。
- (2) 「足立製作所破壊事件」(『労働』第十卷第三号 大正十年三月 九頁)。
- (3) 「奴隷と反抗」(『同胞』第六号 大正十年三月 一頁)。
- (4) (5) 「失業と労働」(「足立製作所の争議」(「日本鉄工株式会社の争議」(右同 第五号 大正十年二月 四―五頁)。
- (6) 「園池製作所の争議」(右同 第七号 大正十年四月 四頁)。
- (7) (8) 「新人会記事」(右同 第三号 八頁)。
- (9) 中田惣寿「川崎・三菱争議と中田小春——八聞き書——戦前の労働運動と婦人活動家——」(『社会評論』第二卷第三号 昭和五十一年五月 一九二頁)。
- (10) 『同胞』第六号 六頁。
- (11) 例えば、大正九年における東京城南地区の労働者研修活動は大凡次のようであつた。大正九年二月十四日、友愛会城南連合会主催学術研究会、講師・佐野、岡上、山名(『労働』第九卷第四号 大正九年四月 一六、一九頁)。二月二十八日、同研究会 講師・岡上、佐野(右同 一六頁)。四月二十四日、同研究会 講師・山名、佐野(右同 第六号 六月 十二頁)。五月八日、同研究会 講師・山名(右同 第七号 七月 一七頁)。五月二十二日、同研究会 講師・佐野、山名(右同 第二十二頁)。六月十二日、同研究会 講師・佐野(右同 第八号 八月 一七頁)。六月二十八日、同研究会 講師・山名(右同 一八頁)、等であつた。

- (12) 例へば、赤松克麿は、大正九年一月二十五日、友愛会関東出張所東支部における労働問題講演会で講演した。肩書きは、新人会赤松法学士であつた(右同 第九卷第三号 大正九年三月 二〇頁)。門田武雄は、同年二月十一日、同出張所町田支部発会式で、「マルクスの思想」と題して演説した(右同第九卷第四号 二〇頁)。
- (13) 「東京連合会日記抄」(右同 第十卷第二号 大正十年二月 一七頁)。
- (14) 「北九州工業地を巡りて」(『同胞』 第一号 大正九年十月 七頁)。
- (15) 前掲、中村・酒井「『同胞』の思想」参照のこと。
- (16) 渡辺惣蔵「北海道社会運動史」(レポート社 昭和四十一年五月五日) 七六頁。
- (17) 「奥の細道」(『同胞』 第五号 大正十年二月 七頁)。
- (18) 前掲、渡辺「北海道社会運動史」七五頁、棚橋生「北海道宣伝旅行記」(『労働』 第九卷第十二号 大正九年十二月 一四一―一五頁)。
- (19) 前掲「奥の細道」。
- (20) 前掲、渡辺「北海道社会運動史」七七頁。及び前掲「奥の細道」。
- (21) 前掲、渡辺「北海道社会運動史」七七頁。
- (22) 赤松生記「筑紫路の旅」(『同胞』 第六号 五頁)。
- (23) 「新人会記事」(『デモクラシー』 第七号 大正八年十月 一六頁)。
- (24) 黒川四郎(赤松克麿)「友愛会日立支部遭難に就いて」(『先駆』 第一号 大正九年二月 三七頁)、及び「獄中の麻生君よりの来信」(右同 三三六頁)。
- (25) これについては、断片ながら『麻生久伝』(麻生久伝刊行委員会刊 昭和三十三年八月一日) 一四〇―一五一頁、一六〇―一六七頁が参考となる。
- (26)、(27) 「尼尾紀行」(『同胞』 第一号 三頁)。
- (28) 前掲、中村・酒井「『同胞』の思想」参照のこと。
- (29) 「新人会記事」(『同胞』 第三号 八頁) 及び前掲「麻生久伝」一五一頁。
- (30) 「新人会記事」(『同胞』 第四号 大正十年一月 八頁)。
- (31) 前掲「筑紫路の旅」。
- (32) 「新人会記事」(右同 第七号 八頁)。
- (33) 「上富士前より」(右同 第八号 大正十年五月 八頁)。
- (34) 「尼尾事件報告会」(右同 六頁)。
- (35) 「尼尾事件を顧みて」(右同 七頁)。

(36) 前掲、中村・酒井「『同胞』の思想」を参照されたい。

四 地方支部

『同胞』誌は、地方支部会員との連絡を密にし、その活動を積極的に紹介すべく、支部会員用の欄を常設することにした。⁽¹⁾これは、前二誌『デモクラシー』、『先駆』には見られない点であつた。この時期の地方支部は、小樽支部(責任者・河野鋭二)、秋田支部(同・佐藤賢太)、金沢支部(同・示野吉三郎)、能登支部(同・加藤耕二)、福井支部(同・東次市)、京都支部(同・船越基)、大阪支部(同・河西太一郎)、広島支部(同・丹悦太)、佐世保支部(同・小池行松)、熊本支部(同・米村徳三)であつた。⁽²⁾十を教えた地方支部のなかでは、地方都市の工場労働者が中心となつた支部、農村地域を基盤に設立された支部の一部が活動の足跡を残しているが、実態が把握しがたい支部が大半である。小さな会合の外は何にもした事はありません。⁽³⁾という支部もあつた程である。

新人会地方支部のなかで、地方都市の工場労働者が結成した広島支部は、組織の規模が大きく、活動内容においても、労働団体の性格をもち、広範かつ活発であつた。広島支部は、大正八年七月、広島市元宇品町、宇品造船所の労働者丹悦太が会員約百名近くを集めて結成した。丹がみずから支部長となり、会員として三崎良一(号・良水)、森本丹のほか、木挽組合より山本某が参加し、毎月会費として三十銭を徴収した。⁽⁴⁾事務所は市内元宇品町にあつた。⁽⁵⁾支部結成当時、デモクラシーの風潮に乗つて、普選要求運動が全国的に高まつていた。大正八年十一月三十日、同九年四月十七日、丹悦太は普選要求の運動者とともに、市内の広島劇場で普選要求の演説をおこなつた。同九年六月には、丹が中心となつて広島製針朋友会、広島活版親友会、新人会広島支部の三団体をまとめ、『広島労働連盟』を結成した。⁽⁶⁾広島支部に対しては、新人会本部からも、門田武雄(大正九年七月十一日)、赤松克麿(大正十年一月十八―二十日)が訪問し、労働者階級の解放をテーマに、演説会、支

部主催座談会などに参加している。丹からは、新人会本部に丹自身らの活動に関する記事の載っているレビューが贈られていた。⁽⁹⁾新人会本部は、支部の活動に関する情報を得ることができた。大正十年二月、新人会広島支部は九州の労働団体——浅原健三の日本労友会、坑夫協会、九州鍼力工組合、博多織職組合と、当時九州に移住していた三崎良一の新人会福岡支部との間に、提携協定を結んだ。⁽¹⁰⁾この六団体の共催で、二月十六日午後七時より広島市公会堂において「労働問題政談大演説会」が開催され、翌十七日にも呉市内において同演説会が開かれた。各弁士とも産業組織の欠陥を指摘し、労働運動の真諦を説き、労働者の環境を批判し、社会組織の不合理を論じた。⁽¹¹⁾さらに支部指導者丹悦太は支部を社会主義団体へ接近させた。丹は日本社会主義同盟にも加入し、東京本部と連絡をつけ、大正十年三月十八日、堺利彦、荒畑寒村、高津正道ほか十名を広島に呼んでいる。⁽¹²⁾同年五月一日のメーデー、新人会広島支部は、市内広瀬町の広瀬神社において、午後一時より「労働者大会」を開き、つづいて同所で演説会を開催している。⁽¹³⁾このように、広島支部は丹を中心に、その独自性を發揮し、県内労働団体の連盟結成、演説会、宣伝活動等の諸活動をおこなったが、それを通じて同支部は単なる地方支部から脱し、独立の社会主義団体の性格を現わすほどであった。

農村地域を基盤に設立された支部には、金沢、福井、秋田などがあつた。主として農村の目覚めた青年たちによつて作られたものである。⁽¹⁴⁾これらの支部の会員には、小地主や自作農の子息が多い。金沢支部では河合正治は小地主の長男であり、⁽¹⁵⁾他にも地主自作農の青年たちが含まれていた。⁽¹⁶⁾福井支部では、創立者東次市は屋敷に住む身分であつた。⁽¹⁷⁾秋田支部では、責任者佐藤賢太は小学校卒業後、早稲田の政経科講義録で勉強し、一時東京において時事新報社社会部市内通信員であつた。⁽¹⁸⁾かれらは、地方農村青年として社会意識に目覚めたインテリであつた。同支部においては、地域の「読書同好会」と連合して講演会を開ける雰囲気があつた。⁽¹⁹⁾要するに、金沢支部会員示野吉三郎の妻勝目テルが記したように、地方農村支部の会員たちは、「たべることに安定があつた」⁽²⁰⁾人びとであつた。小作人の解放を高唱し、新人会の思想に共鳴して地方支部を形成

した青年たちの多くは、新人会本部の学生と同様に、明日の生活に汲々とする状況にはなかつた。

金沢支部は大正八年七月設立された⁽²¹⁾。会員は示野吉三郎、番匠喜正、河合正治、沢飯吉三郎、北川重吉、高木与一、上野某らであり、地主や自作農の青年、労働者たちであつた⁽²²⁾。同支部はのち四高生泉忠らと接触し、彼らにある一定の影響を与えることになつた⁽²³⁾、という。金沢支部設立には、四高出身者新明正道（大正七年卒業）の尽力があつた⁽²⁴⁾。新明は二年生の夏休みに帰省した際、新人会本部の希望もあつて金沢支部設立の工作を試み、知己の進歩的な農村青年に働きかけ、支部を結成させた⁽²⁵⁾。支部の所在地は、犀川のほとり、金沢市六斗林二一八八、うすぎたない下宿屋の二階の一室であつたが、ここで金沢支部機関紙『異邦人』が編まれた⁽²⁶⁾。新明によれば、金沢支部は新人会支部のなかでも、もつとも重視された⁽²⁹⁾。新明はこの支部に機会を見て顔を出し、種々の知識を注入したようであるが、彼が卒業する大正十年頃には、示野あたりを中心として、アナーキズムないしサシジカリズムの傾向が多少有力化して⁽³¹⁾、という。大正十年前後の思想界の傾向の一端が、新明というパイプ役を通じて流入したのである。金沢支部は、新人会本部と連絡が比較的密な支部であつた。河合正治は新金沢支部の新明につれられ、東京市外高田村の新人会本部に逗留し、手の足りないままに勝手も手伝つたことがあつた⁽³²⁾。新人会一周年記念会前後の時期であつた。大正九年二月から三月にかけ、番匠正喜、沢飯喜三郎の二名が上京し、新人会本部に投宿している⁽³³⁾。『同胞』の時代においては、示野吉三郎が大正九年十二月十日の社会主義同盟大会出席のため上京し、新人会本部に滞在した⁽³⁴⁾。金沢支部と新人会本部とは珍らしく交流が活潑であつた。

金沢支部は、大正十年二月はじめ、不穩文書所持の嫌疑で、家宅搜索を受けた⁽³⁵⁾。これは同年一月二十七日、新人会本部が不穩文書所持の疑いで搜索された余沫であつた。支部会員高木与一の新明に宛てた葉書が搜索の際押収されて高木は拘引となり、つづいて支部の搜索がおこなわれたのである。搜索は、示野、北川、上野、沢飯、河合と五名の支部会員の住宅に及んだ⁽³⁶⁾。河合正治は、落花狼籍、一網打尽、何もかもふみにじられた⁽³⁷⁾、と本部に通信した。『同胞』はこの一件のため衣食の道

を絶たれそうなる者も二名ある⁽³⁸⁾、と危急を報じた。家宅搜索を受けた金沢支部に寄付を寄せる人がいた。林要、河西太一郎、嘉治隆一、堺利彦等の氏名を『異邦人』紙上に見ることができ⁽³⁹⁾る。また搜索を受けた後の示野吉三郎の下宿には、新明正道が訪れ、敵の攻撃に対して、いつまでも反撃の態勢をとれ⁽⁴⁰⁾、と鼓舞した。同支部からは意気盛んな通信が寄せられた。すなわち、いつまでも眠っている農民間に——地主と小作人との——問題が起らんとしつつある、正義の叫が聞けるようになった、この火の手はどこまで燃え広がるだろう⁽⁴¹⁾、という。金沢支部は北陸三県にも連携の輪を拡げ、機関紙『異邦人』を、その連携組織である北土会の発行と改め⁽⁴²⁾た。

『異邦人』は、新人会金沢支部による啓蒙宣伝活動の拠り所であつたが、同紙には『同胞』に表出した新人会の思想をより鮮明に表現したところがある。会員北川重吉は、近代の機械文明、資本主義の生産体制を批判し、これによつて人間性そのものさえ侵蝕され麻痺され、遂には一個の有機物と化した⁽⁴³⁾、という。それは人間が機械に同化することであり、その人が死人になつたと同じことだ、人間の生活が無味乾燥な潤いのないものになつた、と難じた。河合正治は、すでに紹介したごとく⁽⁴⁴⁾、彼らの郷土が資本主義の都会文明によつて平穩な相互扶助、相互連帯の生活を打ち破られ、不自然な生産掠奪の征服的社會組織に變つた、と糾弾していた。この兩者には、殺伐たる人間の生活を忌避し、郷土にかつてのごとく潤いある人間の生活を回復させたいとの願望が湧溢していた。この立場こそ、新人会金沢支部における活動の基点であつた。彼らの第一目標物は、農業の資本主義化によつてもたらされた地主と小作人との隷屬關係の打破となつた⁽⁴⁵⁾。これは、同じく地方農村支部の福井⁽⁴⁶⁾、秋田の支部においても、最大の関心事であつた。『同胞』もこれに應じて、小作人の解放を取り挙げ「工業労働者運動の場合に於けると同じく飽く迄も徹底したる階級意識の上に立つ組織的永続的の組合運動が絶対必要である⁽⁴⁸⁾」と論じた。新人会金沢支部は、新人会本部との人的脈絡、支部会員の構成等において、『同胞』に表出した新人会の思想を表現するに適した立場にあり、またその体現に努めた有力支部であつた。

『同胞』時代の新人会の活動

一一〇 (二六二〇)

- (1) 「上富士前町から」(『同胞』第一号 大正九年十月 八頁)。
- (2) 右同 第六号 大正十年三月 八頁。
- (3) 京都・船越基「同志通信」(右同 第七号 大正十年四月 八頁)。
- (4) 山本茂「広島県社会運動史」(労働旬報社 昭和四十五年三月十五日) 二〇一頁。
- (5) 内務省警保局「思想団体表」(大正十年四月十五日調)によれば、事務所は、広島市元町字品町二三二、となつている(社会文庫編『大正期思想団体視察人報告』八柏書房 昭和四十一年六月五日) 九七頁所収)。
- (6) 前掲、山本「広島県社会運動史」二〇一頁及び「新人会記事」(『先駆』第六号 大正九年七月 一頁)。
- (7) 門田武雄「鹿兒島と広島」(右同 第七号 大正九年八月 一九頁)。
- (8) 赤松生記「筑紫路の旅」(『同胞』第六号 五頁)。
- (9) 「新人会記事」(右同 第四号 大正十年一月 八頁)。
- (10) 前掲、山本「広島県社会運動史」二〇二頁。
- (11) 丹悦太「労働問題大演説会」(『同胞』第七号 七頁)。なお、各弁士と演題は次の通り。会場・広島市公会堂 丹悦太「開会の辞」、三崎良水「闘争か平和か」、本田直夫「故郷の同志諸君に」、浅原健三「新春を迎えて」、丹悦太「慮げらるゝ労働者」。会場・呉市呉座 本田直夫「苦痛体験より」、三崎良水「労働運動の根本義」、浅原健三「彼れは乎我れ非乎」、丹悦太「生ける屍の叫び」。
- (12) 前掲、山本「広島県社会運動史」二〇三頁。
- (13) 右同 二〇四頁。
- (14) 沢田清兵衛「同志談林」(『同胞』第二号 大正九年十一月 七頁)。
- (15) 勝目テル「未来にかけた日々」(平和ふじん新聞社 昭和三十六年十二月十日) 一〇二頁。
- (16) 右同 九八頁。
- (17) 前掲、沢田「同志談林」。
- (18) 小沢三千雄編「秋田県社会運動の百年」(昭和五十二年十二月) 九三頁。
- (19) 「奥の細道」(『同胞』第五号 大正十年二月 七頁)。
- (20) 前掲、勝目「未来にかけた日々」一〇一頁。
- (21) 資料四高学生運動史刊行会編「資料第四高等学校学生運動史」(総合図書 昭和五十一年十一月一日) 二二六頁。
- (22) 右同。なお、機関紙『異邦人』には、前掲の会員の他、蓮野佐太郎、沢飯七郎、泉忠、高木大船、中島安太郎らの名前があるが、会員か否か、ペンネームなどについては定かでない。また、前掲、勝目「未来にかけた日々」には、前出以外に、沢井七郎、沢井善三郎、殿村、の氏名が挙げられている。

(二〇三頁)。

- (23) 前掲、『資料第四高等学校学生運動史』八頁。
- (24) 『新人会記事』(『デモクラシー』 第六号 大正八年九月 一六頁)。
- (25) 新明正道『新人会金沢支部について』(前掲、『資料第四高等学校学生運動史』一一五頁所収)。新明は結成の経緯を次のように回想している。「私は夏休みや冬休みにはかさず金沢に帰省していたもので、たしか二年生の夏休みに帰省した際、本部の希望もあつて、金沢支部を作る工作を試みた。というのは、当時すでに私は思想的に進歩的な若干の農村青年と知り合つていたからである。私は四高の三年生の頃から白銀町のキリスト教会に出入りし、当時牧師をしていた松岡貞一さんと昵懇になり、松岡さんの勧めで夜の説教の時間には、代つてキリスト教社会主義めいた内容の話を数回教会で試みたことがあるが、これを聞きに来ていた河北郡の安江君を介して、河合君、沢飯君その他とも知り合うことになつたので、この人たちに支部結成の話をもちかけたところ、皆大賛成ですぐ参加してくれた」(右同)。
- (26) 『異邦人』第二巻第三号 大正十年四月 一頁掲載。
- (27) 前掲、勝目『未来にかけた日々』九二頁。
- (28) 編輯兼発行兼印刷人、金沢市長柄町四四、示野吉三郎。印刷所、金沢市中町九番地、中村活版印刷所、とある(第二巻三一五号)。なお、『異邦人』は、つぎつぎ発売禁止になつた、という(前掲、勝目『未来にかけた日々』八五頁)。
- (29) 前掲、新明『新人会金沢支部について』。
- (30) 前掲、勝目『未来にかけた日々』九九頁参照。
- (31) 前掲、新明『新人会金沢支部について』。
- (32) 林妻『おのれ・あの人・この人』(法政大学出版局 昭和四十五年六月五日) 二二二頁。
- (33) 『新人会記事』(『先駆』 第三号 大正九年四月 一頁)。
- (34) 『新人会記事』(『同胞』 第四号 大正十年一月 八頁)。
- (35) 前掲、勝目『未来にかけた日々』九四頁。
- (36) 『家宅捜索』(『同胞』 第六号 八頁)。
- (37) 『落花狼藉』(右同 第七号 七頁)。
- (38) 『上富士前町から』(右同 第六号 七頁)。
- (39) 『暴風一過』(『異邦人』 第二巻 第三号 二頁)。
- (40) 前掲、勝目『未来にかけた日々』九五頁。
- (41) 番匠喜正『同志通信』(『同胞』 第七号 八頁)。
- (42) 『異邦人』第二巻第五号 大正十年五月 二頁欄外。
- (43) 北川重吉『生活とその表現』(右同 第二巻第三号 一頁)。

- (44) 中村勝範・酒井正文「同胞」の思想(『法学研究』第五十二卷第十一号 昭和五十四年十一月)を参照されたい。
- (45) 河合正治「春の野良より」(『異邦人』第二巻第五号 二頁)には、古老の話として、某村の横暴な大地主が、小作人の反抗によって、手痛い目にあつた例が紹介されているが、河合はそれが「今の自分等であるように思い、勝ち誇つた心持ち」になつたと感想を記している。
- (46) 大正九年夏、福井支部を訪れた沢田清兵衛と支部会員の話題の中心は、小作農の解放であつた(沢田清兵衛「同志談林」ハ『同胞』第二号 七頁)。
- (47) 大正十年一月、秋田支部を訪問した三輪寿壮、嘉治隆一、莊原達、千葉雄次郎の四名の会員と支部会員との間で、横暴非道な地主による小作人の圧迫の問題が語られた(「奥の細道」ハ右同 第六号 七頁)。
- (48) 「小作人運動の勃興」(右同 第八号 大正十年五月 三頁)。

五 伝道行商的精神

既述のごとく、新人会員は地方を巡り、労働者、農民、地方支部会員及びその同調者ら、社会運動上にあるとした人びとと交流、接触し、その訴えを聞き、自らの思想を説いた。これらの仲間の諸君に親しくお目にかかり、膝を交へて相語り、反抗児の寂しさと苦しさを慰め合い、励まし合いお互に未知の世界の事情を伝えて啓発しあいたい、⁽¹⁾というのであつた。新人会員の地方巡りは、労働組合との人的脈絡、地方支部会員の活動力、出身地及び出身高校などを基礎にした人的関係、等々が足場となつて展開されたが、その態様には、往事の明治社会主義者の遊説旅行、すなわち伝道行商のそれを彷彿させるところがあつた。新人会員は、北海道、九州の一角、遠く東京を離れた地方で、その思想、精神を世人に披瀝し、同志の拡大をめざした。

大正九年十二月末から同十年正月にかけ、前出のごとく三輪寿壮、嘉治隆一、千葉雄次郎、莊原達の四名の新人会員が、北海道内を旅行しているが、以下その旅程を追つて見よう。大正十年一月三日午後、一行は夕張町に入り、全日本鉱夫総連合会の夕張連合本部を尋ね、荒々しい位元気な鉱夫の話に耳を傾け、その晩四名は各々別れて鉱夫の家に宿をとつた。家族

のなかに入つて、暖炉の熱に外界の寒さも忘れて、坑内の労働、生活の話、組合のことなどを聞かされた。鉱夫仲間も後から加わり、話が弾み、卓子スピーチということになり、この賑かさは十二時近くまで続いた、という。四日は真谷地に向い、同じく労働者の家に一泊し、この地の組合の成立から今日に至るまでの経過、その活動の状態などを詳さに聞いた。実生活に根柢をおいたそれらの話は強い印象を残したというが、その夜も夜更におよぶまで語り合つた。五日、登川到着、夜六時より講演会を開催した。夕張総連合会員、同登川支部員の熱弁後、新人会員は各々思い思いのことを述べた。六日、白老、アイヌ酋長の一人を訪問し、ここで新人会員は、資本主義の悪弊を見せつけられた。六十歳を超した酋長の話の多くは、活計の困難、収斂の苛酷についてであつた。往事を物語る時には凹ぼんだ酋長の両眼には、過去の生活に対する憧憬と現在の制度に対する呪咀が歴々と浮んでいたという。しかし、一行はその酋長から話の代償に謝礼を強制されたのである。新人会員は資本主義に怒をこめて、「素朴なアイヌをしてこんなさもない根性に墮落させたのも悪辣なワシ人共の所業だ。悪むべきは滅び行く種族にまで悪感化を及ぼしつつある資本主義的悪精神だ」と記した。

大正十年一月七日から十五日にかけては、赤松克麿が九州を旅している。⁽³⁾一月八日、赤松は長崎に赴き、前年十一月の労働争議、香焼事件で収監されている鉱夫総連合会幹部と面会した。十一日、赤松は長崎を發つて柚木に到着した。坑夫納屋で有志と会合し、簡単な講演をする。このとき鉱夫たちから寄せられたさまざまな生活上の不満や苦痛は、虐げられしプロレタリアの悲しい呻吟であつた、という。翌十二日夜、赤松は、熊本に着いた。徳永直、米村徳三ら新人会熊本支部会員らと一晚を過した。「同志諸君は新進気鋭の人が多く、潑瀾たる気分が漲つて居る。初対面とはいへ、同じ理想に生きる諸君と膝を交えて団欒すれば、全く十年の旧知に逢いし喜びを感じる」という。さらに赤松は、福岡から伊田、後藤寺と宿を変え、講演、懇談の日々を過している。

こうした遠隔地、北海道、九州での旅程において、新人会員はその活動の倫理性を、現実との交流、接触の場面で改めて

自己確認した。巡るところで目撃した資本主義及び資本家のもたらしたさまざまな悪弊と比較すると、彼らの精神は清く、活動は貴しと感じさせるような事実と直面する。前出のごとき資本主義の悪弊に犯されたアイヌの酋長の現実の姿は、新人会員に彼らが理想として抱く相互扶助的、社会連帯的な共同生活の社会像と、途方もなく広がる資本主義に侵蝕された現実の生活状況との巨大な懸隔を、痛感させた。地主・工場側の横暴、鉦夫生活の窮状、小作人の生活の圧迫などの現実を見聞きして、新人会員は暗黒の海を、自己の意志をもつて航海して行く船の感じさえ抱いた。自分には自分の光線がある、という。暗黒の海にも輝きをもつて進む我有りという倫理性の意識である。輝きは彼らの理想の社会観が光源であつた。新人会員の活動の倫理性の意識は、殉教者、革命の犠牲者の姿を連想させた。赤松克麿は長崎の地で次のごとく感傷に浸つた。⁽⁵⁾

すなわち、長崎の風物には深い懐味を感じる、特に天主教徒の古事は、心の緊張を呼び起すという。大浦の天主教の会堂の前には高さ四尺ばかりの美しい大理石のマリアの立像があつた。それは四百年前幕府が暴戾なる邪教禁圧政策を取つたときに、信徒によつて隠匿され、そのまま人知れずに埋没していたものだつた。碑文には、会堂のある丘は、かつての天主教徒の刑場であつて、多くの信徒が焚殺もしくは斬殺され、しかも莞爾として刑に服した、とある。赤松は、この信徒たちの壮烈な殉教的精神を憶うとき、その全身が雷雲に触れたごとく衝動を覚えた、と記している。前出の北海道を旅した会員たちは、あたかもロシアの社会主義者の心情のごとくに自らを意識することがあつた。それは札幌において、吹雪をつき櫓を駆つて森本厚吉博士を訪ねる場面であつた。「数尺の雪に埋もれた広い道を櫓は一文字に走る。馬の頸につけた鈴がカラ／＼と響く。四人は外套の襟を立て、小さくなり乍ら西比利亚に流刑となつて数千哩の雪の原を行くロシアの社会主義者の事を話した⁽⁸⁾」という。

新人会員は、資本主義の悪弊に苦しむ、とかれらが考へる人びとを各地に訪ね、その訴えを聞き、実状を見聞し、新人会の抱いた思想を説かんとしたが、会員の地方巡りの活動には、集団、組織のオルガナイザーとしての性格が薄かつた。北海

道、九州での旅先にあつては、演説、対話の類はあつたが、地道な組合運動従事者の事跡はほとんど示さなかつた。むしろ新人会員はわが目ざす理想社会の像を携え、受け入れられるか否かを案じるより先に、一人一人を対象に交流し、思想の行商に努めた。会員は旅先において、社会運動に深い理解と熱心をもつ人、あるいは新思想を奉ずる人がいると聞けば、初対面ながら進んで接触してゐる。新人会の地方巡りには、ときに伝道者の姿を想起させる一面があつた。

(1)、(2) 「奥の細道」(『同胞』第五号 大正十年二月 七頁)。

(3) 赤松生記「筑紫路の旅」(右同 第六号 大正十年三月 五頁)。

(4) 新人会熊本支部は大正九年十月一日、発会式を行ない、本部から門田武雄が出席している(「上富士前町から」 八右同 第一号 大正九年十月 八頁)。

(5) 「同人語」(右同 第七号 大正十年四月 五頁)。

(6) 「雑感」(右同 第八号 大正十年五月 八頁)。

(7) 前掲、赤松「筑紫路の旅」。

(8) 前掲「奥の細道」。

(9) 右同 参照。

六 結 語

『同胞』の時代における新人会の活動は、彼らが抱いた思想、精神により発するものであつた。機関誌『同胞』の発行そのものもつ効果は言うまでもないが、講演、演説等の手段による思想の啓蒙宣伝、地方支部を通じての活動拠点の拡大、労働者、農民等との交流、接触など、その活動は広範囲で多種多様な領域と方法でおこなわれた。活動に多種多様な性格があつたにもかかわらず、新人会の活動の基点が一点に絞られたものであることの証は、諸活動の前面に、側面に、ときにその一部分に表出してゐた。新人会は古くて新しい彼らの社会観、すなわちわが国に以前あつたと彼らが考える、共同体社会における相互扶助的生活、相互運帯の生活理想を、資本主義の侵蝕より再度回復したいとの観点において、現下の社会組織

の悪弊の被害を被っている各部分に接触しようとした。新人会員は、情誼の通う仲間意識で結ばれた社会が再来せよと願つたのである。その際、新人会員の活動の精神には、殉教的な意識を帯びていただけに、活動は熱心であつた。この時期の新人会の活動には、オルガナイザーとしての側面は薄かつた。『同胞』の誌名の通り、新人会員は同胞の増大を期待したが、活動それ自体、集団の組織化、動員化等に事跡を残すものではなかつた。その伝道行商的諸活動はときにそれだけで完結する性格の一面をもつていた。